中国知識人の苦難に満ちた歴史を記録し続ける記者、李輝について

蔭　山　達　弥

はじめに

大学卒業後、1980年代より三十有余年、『北京晩報』、『人民日報』文芸担当記者に身を置きながら、いまは鬼籍に入られた巴金、蕭乾、沈从文など名だたる作家・文化人との交流、取材活動を通して、『囚われた文学者たち』[1]をはじめとする数多くの伝記・散文・翻訳を発表してきた著名作家、李輝。その代表作のひとつに1994年から雑誌《收获》に足かけ三年掲載された《沧桑看云》がある。《沧桑看云》は、その中の一篇《秋白茫茫》の書名を変え、天津教育出版社から出版され、同書は1998年の第一回魯迅文学賞の散文賞を授賞した。末尾に1993年11月と記してある《沧桑看云》題记を読むと、李輝が老人、しかも文壇の大物と付き合い、その結果、伝記作家として高い世評を得るようになったのか、その訳を知ることができる。李輝は卞之琳の詩『断章』を引用して次のように述べている。[2]

> 友人たちは私がどうして昔のことを書きたがるのか常々不思議がる。私は言う、昔日の中に現実の影が見えるからだ。失われた歴史の移り変わりの激しさに比べれば、現実はどれくらい弱々しく、軽く見えることか。妻もよく私をからかう。あなたは時間を繰り上げて老年に入り、老人とどうしてそんなに多くの話題を共有できるのかと。私は言う、老人が目の前にいると生命の豊かさを体感するからだと。老人一

人一人が歴史である。歴史は私たちに年老いたことを知らせるにとどまらず、私たちに青春の活力をいっそう与えてくれるのだ。現実はいつも過去の上に成立する。私たち自身も同様に歴史を記録しているのだ。私は喜んでペンを歴史の大きな変化の中に浸して、目は常に今日を注視し、明日も眺める。私は卞之琳の『断章』という詩が好きだ。

你站在桥上看风景，
看风景人在楼上看你。
明月装饰了你的窗子，
你装饰了别人的梦。

（お前は橋の上で風景を看ている　風景を看る人は楼上からお前を看ている　明月がお前の窓を装飾し、お前はよその人の夢を装飾する）

『断章』武田泰淳訳[3)]

どこまでも続く歴史の大きなうねりの中で、すべての人やものごとは、すべて浮かぶ雲だ。それらは互いに引き立てあいながら、歴史の複雑さと豊かさを表してくれる。そこで、私は雲を見ている。実際、誰もが雲を見ているのだ。（筆者訳）

“沧桑”は“沧海桑田”を縮めた言葉。《汉语成语考释词典》[4)] によると、「大海原が陸地に変わる、陸地が大海原に変わる。その後、世の中（多くは社会の様相）が大きく変化する」と解釈している。李輝は“沧桑”という言葉を好んで使う。沈从文と丁玲が知り合い、助け合い、友情を深めたのに、ある時を境にして二人の間に溝ができ、仲が悪くなる六十年間を追った著書の表題は《恩怨沧桑　沈从文与丁玲》（1991）である。1998 年には海天出版社から“沧桑看云书系四种”を編集し出版。同年、河南人民出版社から“沧桑文丛”を責任編集、回顧録、日記など二十四種を出した。

師との出会い

李輝が复旦大学に入学したのは1978年2月、既に二十二歳になっていた。文化大革命を経験した人間は皆思う。知識が多ければ多いほど過ちを犯す。李輝はそのような考えに耳を貸さず、復活した大学入試こそが、外の世界に行くことができる。それが唯一の動機だった。李輝は入学後、自分の読書量の少なさに気づく。その年の終わり、級友陈思和と雑談中、二人とも巴金が好きだから、一緒に巴金を研究しようということになり、李輝はある事がしたいので、適当に承知した。ある事とは、巴金が香港の『大公報』に発表していた『随想録』を学校の図書館へ見に行くことである。李輝は読みながら、書き写した。外では読めなかったからである。

まさしくその時、二人は中文系資料室に本を借りに行った。中に入ると、そこには六十を過ぎた教員が座っていた。本棚から1950年代に出版された『巴金文集』を取り出すと、その教員はそれを見て、「君たちが一人の作家を研究しようとするなら、最初の版本を見るべきだ。そうすれば、一番早期の創作状況が分かるだろう。」と言いながら、本棚の前まで連れて来て、自らの手で1930年代に出版された巴金の著作を取り出した。その教員こそが文壇で名の知れ渡った贾植芳先生だった。

贾植芳は当時まだ資料係だった。1955年、胡風事件に巻き込まれ判決が下り、十年余り監獄に入れられた。出獄後、文化大革命が起こり、复旦印刷工場に配属された。あんなに痩せ細っているのに、重い紙を運ぶ重労働をしなければならない。文革が終わると、中文系資料室に戻ったが、名誉を回復していないので、教員にはまだなれなかった。李輝と陈思和は幸運だった。資料室で知り合ったからだ。贾植芳夫婦は校内に住んでいて、子供はいない。李輝は毎週、贾植芳の家に何度も足を運び、食事をして語り合った。贾植芳は日記を書くのが好きで、毎日誰が来て何を食べたか、はっきりと書いていた。李輝はある時、その日記を見て、「先生がこのように

書かれたら、私に食費を返せと言っているようなものです。」と冗談を言った。それほど師弟関係は深かった。当時、贾植芳は《巴金研究资料》の責任編集を担当していて、李輝と陈思和にも手伝わせた。このことを契機に、李輝と陈思和は非公式ながら文革後の最も早い贾植芳の学生となった。李輝は贾植芳の家で、上海在住の胡風分子、王戎、耿庸、何满子、顾征南、1950年代に教えた学生、施昌东、章培恒らと次々知り合った。

李輝は言う。「これは私たちの縁だ。数ヶ月遅かったら、先生に会えなかったかもしれない。先生は若手の教員を連れてすることがあったのだから。先生が災難に遭われた二十余年は、私たち二人を待つためだったのか。私は上海に来て、新しい世界を見たいとこだわっていたが、本当は先生に会うためだったのか。私と陈思和は先生に父親に対するような感覚を抱いていた。」[5)]

2014年、再び华语文学传媒大奖を受賞した《绝响　八十年代亲历记》[6)]の中で、李輝は贾植芳先生と知り合った頃のことを、杜甫の詩『衛八処士に贈る』を織り込んで、次のように書いている。[7)]

> 初対面の時、先生（贾植芳）は六十三歳、私（李輝）は二十二歳、年の差は四十一歳。具体的に言うと、私は1956年生まれ、先生は一年前に胡風反革命集団、中核分子の濡れ衣を着せられ、鉄鎖をかけられ獄につながれ、逆境に陥る。私が大人になる二十年は、先生が運命と抗争した二十年であり、知識人が絶えず悲しみや喜び、別れや出会いを演じた二十年でもある。ある時、私が資料室で本を探していると、年配の先生が部屋に入ってきて先生と話し始めた。ふたりはこれまでお互い過ごすのが並大抵ではなかった、多くの知り合いが、すでにこの世にいないことをなげき悲しんでいた。その先生は杜甫の名句“访旧半为鬼，惊呼热中肠”（旧を訪えば半ばは鬼となる、驚呼すれば中腸熱す）をそらんじた。杜甫が安史の乱の後に書いた『衛八処士に贈る』。

先生は何度もうなずいた。「そうだよ。そうだよ。」それから二人はこの人、あの人と話しだし、それはよく知らない复旦大学の教授たちの名前だった。『衛八処士に贈る』の中に“焉知二十载，重上君子堂”（いずくんぞ知らん二十載、重ねて君子の堂に上らんとは）という句があるが、この詩句は、あたかも時を隔てて二十有余年、再び校庭に戻ってきた年配の教授たちのために書かれたかのようだった。（筆者訳）

贾植芳は確かに李輝の一生を変えた人である。贾植芳の学術的な成果はそれほど高くないという人もいるが、贾植芳にはその人格に相応しい能力があり、多くの教え子を育てた。贾植芳の教えを受けたからこそ、李輝は記者・作家としての仕事を成し遂げることができたし、李輝が取り組んできたことはすべて、師に対する恩返しと心からの感謝なのである。

《文坛悲歌》の執筆に心血を注ぐ

1979 年 1 月 14 日、無期懲役刑の判決に処されていた胡風に釈放の許可が下りた。文革が終結した当初、友人たちは胡風の行方を尋ねたけれど、得られたのは彼が既に死亡したという噂だった。胡風が健在であるという知らせは友人たちを大喜びさせた。災難に遭っても生き残れば、誰でも他人のことを気にかけ、探そうとする。胡風の行方を追うなかで、武漢在住の詩人、曾卓は特殊な役回りを演じた。李輝にとって曾卓は、贾植芳に紹介してもらった上海以外の最初の胡風分子である。1980 年の夏休み、李輝は湖北省随県の実家に帰省する途上、先生からの紹介状を持って、曾卓を訪ねた。曾卓は落ち着いて、堂々と話す、率直な印象深い人物だった。曾卓からもらった刊行物には、彼の詩が載っていて、《寂寞的小花》という詩には“勿忘我”（わたしを忘れないで）という言葉で、お互いに懐かしむ気持ち、再会を待ち望む本心が書かれていた。李輝は复旦大学に戻ると、《“让春天永远留在你心中”读曾卓同志的诗作》と題して、『湖北日报副刊』に発

表した。これは李輝が個人の名義で発表した最初の文章である。

1981年5月29日、贾植芳と友人たちは、顾征南の家（上海）で、胡風夫人梅志と娘晓风に再会した。胡風本人も上海に来ていたが、精神病のリハビリで入院中、まだ会えることはできなかった。李輝もその場に来ていたが、梅志夫人が来る前に帰ってしまい、本人曰く重要な歴史的瞬間を見逃してしまう。（李輝は後日、贾植芳宅で二人に会うことになる）贾植芳が胡風と再会したのは10月23日、《悲痛的告别　回忆胡风同志》にはその時の様子が次のように書かれている。[8)]

> 隔了几天，梅志第二次来我家，她通知我说，胡风约我明日上午去医院相见。（中略）我们进屋时，他还在床上躺着，听见我们和梅志说话的声音，他吃力地挣扎着下床，眼里已经涌现出了泪水，我们也很激动，但强自克制着，强颜欢笑地扶他下床坐在沙发了。他显出一副呆痴状，很少发言，只是悄悄地流眼泪，梅志不断地替他拭泪水，它们又不断地涌出来……直到我们离去时，他呆呆地望着门口我们的身影，兀自流泪不止。我们也不能自持了，我们夫妇泪流满面地离开了这个变相的监狱——精神病院。是的，时隔二十六年之后，我们终于又相见了，我们的泪水里，有着欢欣的激动，而在他的这种激越的感情里，还包含着对因他的名字而遭株连的许许多多朋友和青年的歉愧之情。但是人们是不会怪罪他的，因为这是历史的恶作剧，咎不在他。

李輝が胡風に直接会えたのは、北京に来てまもなくのことであった。1982年2月12日、北京に到着。自分の目で会えたのは3月5日、その日の日記にはこう書かれている。[9)]

> 下午到胡先生家。他的精神看上去比较好，头上已经秃顶了，稀散的白发残留在头上，像是作为岁月的见证。眼睛没有神，但还能看看书。

八十高龄的人，面部肌肉已经松驰了，叠成一道道深深皱纹。真是饱经风霜历经艰辛的老人。

それから、李輝は胡風の家の常客になった。当初はほとんど毎週会いに行き、食事をごちそうになり、复旦大学で頻繁に贾植芳の自宅に行ったのと同じように、胡風一家は新参に家庭のような温もりを与えてくれた。6月、中国文学芸術界聯合会は会議を開催した。この会議は李輝が記者になって、最初に取材した重要な文化活動だった。この会議で九人の委員が補充され、胡風は四番目に選出された。胡風は政治上、名誉回復し、事件の真相は次第に明らかになってきた。内外を問わずこの事件にことのほか関心を持っている。李輝は胡風の取材をもとに、《京华访胡风》を書いた。この原稿は今読んでもごくありふれた文章だったが、当時ニュースメディアでは胡風の名前はまだ禁句であった。李輝は『北京晩報』に発表しようとしたが、責任者たちは困り顔、再三ためらったあげく、結局発表しないことになった。そこで、李輝は原稿を広州の『羊城晩報』に送ることにした。南の新聞のほうが開放されており、仕事上の関係も良かったからである。

当時はファックスもなく、李輝はオートバイで北京西单の電報ビルに行き、四、五十字の用紙に一字一字、千字の原稿を書き写した。半時間余りかかって、二十数枚使った。これは李輝にとって生涯最長の電報となり、レポートは7月3日の『羊城晩報』に掲載された。

それから二年後（1984年）、李輝に胡風事件の過程を集めて記録しようという考えが浮かんだ。当時、この事件に関する話題は、新聞界ではまだ禁止区域だった。李輝はただ本能的に、多くの当事者が健在なうちに、できる限り取材して、口述記録を残し、後世の研究のために資料を残そうと考えたからである。李輝はこの考えを手紙に書いて、師・贾植芳に伝えた。師はより広い歴史角度から、彼を啓発した。[10)]

> 你着手就一九五五年胡案编一本系统性的材料，我觉得倒是一个值得下点工夫整理的课题。…我希望趁现在这些人还多半活着，业余不妨即行动手进行，当然它的付印出版，恐怕不能期之最近，其中原因，不说自明。（1984. 11. 17.）

師は李輝にヒントを与え、歴史を追う大きな扉に足を踏み入れるよう促した。四年後、資料集を編集するという考えは変わり、三十万字あまりの長編ノンフィクション《文坛悲歌》を《百花州》（1988 第 5 期）に発表したのである。

もう一人の師・蕭乾

自分は運の良い人間だと李輝はよく言う。人生の鍵となる時、常に文化界の先輩に出会い、指導と援助を受けることができたからである。大学では贾植芳に出会い、師は李輝の研究と人生に深い影響を与えた。そして社会人になってから李輝の創作に大きな影響を与えたのは蕭乾である。蕭乾は新聞界・文化界の先輩であり、副刊編集の名手である。李輝が北京に来てから、蕭乾は取材対象であり、原稿を依頼する作者でもあった。李輝が蕭乾に「あなたの体に染み付いた“老北京”を教えて欲しい」と言ったのは 1985 年、無駄話の最中、蕭乾は「一連の“老北京”に関する文章を書きたい。面白く書かないといけない。」と言った。これらの散文は《北京城杂忆》と名付けられた。最初の一篇、李輝はうれしくなった。同僚に見せると正真正銘の“老北京”、北京の故事を研究している者は皆、“好，绝了。”（絶妙だ。）と言った。[11]《北京城杂忆》に続く《“文革”杂忆》、《欧战杂忆》は、すべて李輝を介して『北京晚報』“五色土”副刊に発表された。1987 年、李輝が『人民日報』“大地”副刊に移ってからも、蕭乾は絶えず、原稿を寄せてくれ、1999 年に亡くなるまで続いた。《蕭乾传》は李輝が執筆した最初の伝記である。

萧乾が李輝に書いた書簡は二百通近く、これらの書簡は二十年近くにわたる萧乾の李輝に対する配慮と援助を記録している。萧乾は人生で出会う様々な事柄をほとんど手紙の中に書いていた。2020年、書簡は《萧乾致李辉信札》[12] として出版、公開された。李輝にとって忘れられないのは、《文坛悲歌》を発表後、萧乾が励まし、鞭をふるい、歴史を追い続けるように、叱咤激励してくれたことである。当時（1989年）、李輝は憂うつになり、途方に暮れ、心の中はどうしようもなくなり、数ヶ月一字も書けなくなってしまっていた。何度も苦難を経験してきた萧乾は、李輝の精神状態を知り、何通も手紙を書いた。萧乾が身を持って経験したことと人生の悟りは、李輝を教え導いた。1989年7月26日の手紙で、こう書いている。[13]

> 我强烈建议你此时此刻用具体、带强迫性的工作，把自己镇定下来。什么叫修养？平时大家都一样，到一定时候，有人能坚持工作，有人心就散了。人，总应有点历史感，其中包括判定自己在历史中的位置。心猿意马？我认为缰绳不可撒手。在大雾中，尤不可撒手。这几年你真努力，你应肯定自己的努力。要有个“主心柱儿”不因風吹草动就垮。

萧乾は第二次世界大戦のとき、ロンドンにいた。上空で戦闘機が爆撃していても、地下室でジョイスの『ユリシーズ』を翻訳した。萧乾は李輝に「そのような時こそ、定力（じょうりき：心を乱さない力）が必要だ。人として大切のことは、心を落ち着けて、やることを見つけることだ。」と諭した。その年の秋、李輝は自分を落ち着かせて、これまでとは全く違う仕事、沈从文《记丁玲女士》の校勘を始めた。沈从文は1930年代初め《国闻周报》に《记丁玲女士》を発表した。その後、良友图书印刷公司から《记丁玲》と表題を変え出版された。新聞社の図書館には《国闻周报》を所蔵していて、唐韬、范用両先生から別々に借りた《记丁玲》及び続集と《国闻周报》を照らし合わせた。数ヶ月の間、李輝は図書館の常連になった。静

かな校勘作業の中、李輝は《记丁玲》の中で添削された箇所が、百ヶ所以上、削除した内容は丁玲，胡也频の政治活動についての叙述であることに気づいた。資料を対照して、沈从文は確かに丁玲が1980年代にののしったような人物ではなく、義侠心に富んだ、正直な、友愛に満ちた人物であると李輝は感じた。図書館を出た李輝は、以前と同じように、至る所に取材し、連絡して証拠を探す仕事を始めた。そうして出来上がったのが《恩怨沧桑　沈从文与丁玲》[14] である。李輝は今でもこの作品に愛着を抱いている。

李輝は、「君は英語力を失くしてはならない。たとえ話せなくても、必ず翻訳しなければならない。」と、萧乾に言われたことを思い返す。李輝は記者になってからも、英語の勉強を二十数年続けた。そうでなければ、《封面中国　美国〈时代〉周刊讲述的中国故事1923～1946》のような文章は書けなかっただろう。李輝は2007年、一連の“封面中国”の発表により、“第五届华语文学传媒盛典评选”で“2006年最佳散文家”に選ばれた。[15]

老人と付き合う楽しさ

老人と付き合うことは、李輝にとってやはり楽しく感じる。なぜなら、誰もがみな宝庫だからだ。本当に「一席の話は、本を十年読むより勝る。」彼らは、李輝が知らない多くのことを話せる。だから李輝は老人を尊重し、老人から利益を得ようとは考えず、真心で相手をもてなそうとする。

人生の大先輩と付き合うと、思いやりを感じる。李輝が記者になった1980年代は、老人たちは若い世代にとても良くしてくれた。今、六十から七十の有名人に若い人が付き合おうとすると、実に難しい。彼らの教養はそれより上の世代に遠く及ばない。1980年代に李輝が付き合った老人たちは東西の学問に通じ、教養もあり、若い世代に関心を持ち、しかも何も求めようとしない。李輝はどの大先輩も分厚い一冊の本だと思う。李輝も誠意を尽して、老人たちを手助けして仕事以外の多くのことをする。文章の

整理、インタビューの記録、編集出版など。李輝は《和老人聊天》[16] という本を出した。その中には沈从文と巴金について話す、巴金と沈从文について話すなど、李輝が老人とおしゃべりする過程が書かれている。

李輝は往時を懐かしむ人だ。彼が書くほとんどは文壇の大御所だ。それゆえ、李輝は老人に頼って飯を食っていると揶揄する人もいる。彼が老人としゃべるのが好きな理由について、つぎのように述べている。[17]

> …この数年、私たちの目の前に現れたすでに老齢期に入った老人たち、その思想、その筆鋒はずっと青春の活力を伴っている。冰心、夏衍、巴金、萧乾らが表現する現実生活に対する強い関心、彼らが表現する歴史と現実に対する考え、その反応の速さと深さ、多くの面で絶対に多くの若者を凌駕している。体験の豊かさ、人生の紆余曲折、おのずとその要因であるが、より重要なのは彼らが智者であることにある。智者には抜きん出た才能と知恵がある。智者はいつまでも若い心を持っている。智者は常に明晰な精神を保っている。智者は良心と人生の勇気があるだけではない。（筆者訳）

文壇の大御所と愉快に過ごせる大きな要因の一つは、その世代の人たちは、みな謙虚で穏やかで、もったいぶった様子はせず、しかも互いに損得を考えない。だから、何か用事があっても、彼らは喜んで手伝ってくれる。そのことが、李輝を感動させるし、李輝も彼らのために何かしてやりたくなるのだ。

李輝は、自身を定位置がない、もし分類するなら、歴史に興味がある書き手と見ている。歴史に興味があり、老人を尊敬しているので、老人たちから歴史を理解し、彼らを手助けして整理をし、同時に彼らに関する文章を書くことができるのだと言う。

取材できたのに、取材しなかった作家

李輝が当時、会議でいつも会い、取材できたのに、取材しなかった一人に周揚がいる。周揚について書いた《摇荡的秋千》[18] の中で、李輝は「人びとが歴史上の人物を詳しく見る時、しばしば“これは歴史が作り出したものだ。”と言う。確かに、いかなる人も歴史環境から離れて生きるすべがない。しかし、私たちが歴史的な人物を研究する時、求められるのは冷静さと客観視である。個人的な要因から生れることをおろそかにしてはならない。歴史の悲劇によって個人の責任を見逃してはならない。」と、前置きしたうえで、次のような件を書いた。[19]

> 不同的人的回忆，展现出不同的周扬，或者被看作“天使”，或者被视为“魔鬼”，反差甚远。这可能是真是的周扬。…最典型的莫过于胡风集团冤案的发生。虽然后来把胡风打成“反革命集团”并非他自己的所为，甚至自己也没有料到。但种种意迹象表明，正是他促成了这一历史公案的发生。而且可以这么认为，当时他并不会因为胡风的入狱而感到十分内疚。

周揚は1950年代から60年代にかけて、中国の文芸界で実権を握っていた人物である。たくさんの文芸論争と左翼批判運動を指揮し、一貫して毛沢東文芸思想の権威的解釈者であり、仇敵・魯迅に対する相当なコンプレックスの持ち主でもあった。文化大革命中は牢に入ったが、自身が名誉回復後、周揚自身が関与した「胡風事件」は毛沢東が決定したこと、冤罪の証拠を提供した舒芜に責任があり、我関せず。胡風の妻・梅志によると、最大の被害者である夫・胡風に対するお詫びは一言も発しなかった。

李輝は孙小宁との対話[20] の中で、「わたしが周揚を書いた時、かつて周揚に攻撃された人はいささか不満で、周揚を良く書き過ぎている。幸い皆

さんは文中のわたしの観点に賛成しかねると言うだけで、大した面倒は今のところ起っていない。わたしは、結論は人により違うと思う。わたしにとって重要なのは歴史上の事実の正確さである。文壇の大御所の個人的な恨みからは、できる限り脱却する。」と、述べている。

孫小宁は李輝のなかで言及する人物は、あまたの現代文学研究者が書いているとしたうえで、「わたしはあなた（李輝）の解釈をもっと読みたい。なぜなら、あなたの文は感情的な色彩は乏しいけれど、決して意を凝らして何かを避けようとはせず、目上の人にはばかることもない。」[21] と評価している。

李輝作品の魅力

李輝の散文は感動させる史料（歴史的事実に関する資料）でいっぱいである。しかし、一部の人はそれを“史料散文”と呼んでいるが、大きな誤りである。

多くのいわゆる文化散文は…“学問”に酷使され、時代遅れの観念にしばられ、客体＝史料と主体＝感情が油と水のように遊離している。

李輝の史料はそうではない。直接取材して得た人的資源が臨場感をもたらし、しばしば文章中の焦点を生成する。

李輝のよいところはそこにある。新聞記者という身分が、歴史を高いところから見下ろす高所恐怖症を決して引き起こしていないし、彼は当時の枝葉末節からその後の歴史的意義を予感するのに長けている。たとえ一枚の会議日程表、一着の色鮮やかなコートを直視しても、その中に憎しみが蓄積している意味と未来に判決を覆す索引を感じ取ることができるのだ。このような深い洞察によって、李輝はいとも簡単に読者をあのころの歴史的、文化的雰囲気のなかに連れて行き、むかしの精神暗号を復原するのだ。

以上は、李輝の著書《绝响　八十年代亲历记》に孙绍振が書いた序文[22]の一部を訳して、抜き書きしたものである。孙绍振は、他の作家と比べて

李輝の突出して優れた点を、よく捉えている。

“文史不分家”という言葉がある。司馬遷の『史記』には“华夏五千年，文史不分家。”と記されている。文語文は古人の精華である。多くの文章は当時の歴史、当時の典故と結びつけて、はじめて理解できる。歴史上の人物、事件、現象は文学の創作に題材を提供する一方、歴史の記載、歴史知識を広めるには文学という形式の助けを借りなければならない。八月に亡くなった著名な散文家・邵燕祥は、この言葉“文史不分家”を引用して、つぎのように述べている。[23)]

> 近几年，我更爱读所为纪实文学作品（当然只是一部分）。倒不完全是由于头脑里保留着“文史不分家”的传统观念，也不完全是为了它所能提供的现实信息量。
>
> 想来想去，另一部分纪实文学比起平庸的乃至拙劣的虚构文学作品，包容了生活的可触的多面性和复杂性，因而更具有可能性。

邵燕祥は、ここで「“文史不分家”という伝統的な考え」と述べているが、李輝こそ“文史不分家”を地で行く作家なのである。侯賽は、李輝を“以文学拓宽历史的写作者”（文学を歴史まで広げる作家）と評価している。[24)]

メディアの仕事をする者として、李輝は普通のメディア関係者の役割をするだけに止まったことはなく、彼は当事者（老人）への取材、行き来を通して、歴史の真実に深く迫り、いっぱいの物語と史料を収集して、文学を歴史まで広げる作家になった。李輝はさらに優秀な翻訳者でもある。今日に至るまで、ずっと執筆の手を止めたことはない。

李輝はノンフィクションの執筆に力を注いできた。李輝は言う。「わたしの著作はこれまで現実から離れたことはない。人々はフィクションを書くように言うが、わたしにはできない。わたしは資料が好きだ。あらゆるも

のは資料の上に成りたつ。わたしが編集主幹をしているいくつかの叢書もすべて回顧録、自伝、書簡などすべてノンフィクションの作品だ。」

三十年の著作を総括した一書《纸上苍凉》、序文の副題は“在历史追寻中行走”（歴史を追う中で歩む）、序文で李輝は次のように述べている。[25)]

> わたしは常々心配している。歴史は十年二十年前、四十五十年前、ひいては百年前、時間が流れるように過ぎ去るにつれて、少しずつ解きほぐされるのだろうか。もっと憂慮させるのは、欠けている歴史の叙述と単調な歴史教育は、人々に限られた歴史知識を得させ、この基礎の上に単純化された歴史観を植えつけることだ。著作に従事する者は、歴史に面と向き合わなければならない。イタリアの歴史学者クローチェ・ベネデット（Croce Benedetto）は『歴史学の理論と歴史』のなかで、こう述べている。「実際、歴史は私たち一人一人の身の上にある。その資料は私たちの胸の中にある。私たちの胸はただ一つの試練の場なのだ。」わたしはこの言葉をとても評価する。歴史を書く者は、いかなる方式、いかなる角度をとろうとも、彼のペンは試練の場であるべきで、史料と人物の運命が溶け出し、固まって歴史になるのだ。全部ではなく、自分だけの一つなのだ。

「著作に従事する者は、歴史に面と向き合わなければならない。」李輝の座右の銘である。

注

1）『囚われた文学者たち』上・下、李輝著、千野拓政・平井博訳、岩波書店 1996.
2）李輝《沧桑看云》题记与跋,《平和，或者不安分》鲁迅文学奖散文获奖者丛书, 河南文艺出版社 2002, p309.
3）武田泰淳『臧克家と卞之琳』、『中国文学月報』第五巻、汲古書院 1971. p101.
4）刘洁修編著《汉语成语考释词典》商务印书馆 1989.

5） 高渊《访谈李辉（上）媒体人的另一条路》上观新闻（Shanghai Observer）2015. 12. 20.

6） 李輝《绝响　八十年代亲历记》三联书店 2013.

7） 同上 p37.

8） 贾植芳《悲痛的告别》,《我的人生档案　贾植芳回忆录》江苏文艺出版社 2009. p309.

9） 李輝《绝响　八十年代亲历记》三联书店 2013. p55.

10） 李輝《自序：在历史追寻中行走》,《纸上苍凉》复旦大学出版社 2010. p7.

11） 李輝《难以重叠的重叠　萧乾印象素描》,《萧乾传》江苏文艺出版社 1993. p359.

12） 萧乾著、李輝編《萧乾致李辉信札》浙江人民美术出版社 2020.

13） 同上 p53.

14） 李輝《恩怨沧桑　沈从文与丁玲》百花文艺出版社 1992. 11.　同書は装いも新たに《沈从文与丁玲》修订本として、2019 年、大象出版社から出版された。

15）《著名作家李辉：纸媒是一生事业 巴金教会我说真话》人民网文化频道 2016. 10. 20.

16） 李輝《和老人聊天》大象出版社 2003. 9.

17） 李輝《老人的感觉》, 鲁迅文学奖散文获奖者丛书《平和，或者不安分》河南文艺出版社 2002. p280.

18） 李輝《摇荡的秋千》, 初出：《读书》三联书店 1993.　第 10 期

19） 同上、李輝《太阳下的蜡烛》垮世纪文丛 6, 长江文艺出版社 1999. p8.

20） 孙小宁《跋：世纪风雨中的寻觅与追踪　与李辉对话》, 李輝《太阳下的蜡烛》垮世纪文丛 6, 长江文艺出版社 1999. p371.

21） 同上、p370.

22） 孙绍振《绝响　八十年代亲历记》序, 李輝《绝响　八十年代亲历记》三联书店 2013.　所収

23） 邵燕祥《我看小说》,《小说界》1993 年第 2 期 . p184.

24） 侯赛《李辉的“不一样”》,《海南日报》2018. 12. 4.《中国作家网》に転載

25） 李輝《自序：在历史追寻中行走》,《纸上苍凉》复旦大学出版社 2010. p17.

略年譜

1956年　中国湖北省随県（現在の随州市）に生れる。

1974年　高校卒業。農村に下放される。

1977年　湖北オイルポンプノズル工場の子弟が通う小学校で教える。10月、父親は反対したが、復活した大学入試を受験。

1978年　上海复旦大学中文系に入学。陈思和と贾植芳の指導の下、巴金の研究を始める。

1982年　大学を卒業。《北京晚报》に配属され、前後して文芸記者と副刊編集を担当する。

1984年　“胡風事件”の当事者への取材を開始、資料集著述の準備をする。《北京晚报》“五色土”副刊のコラム“居京琐记”を主宰する。

1985年　結婚。地方に会議に行った際、人民日报文艺部副主任，舒展から編集者として来て欲しいと誘いを受ける。

1986年　陈思和との共著、論文集《巴金论稿》を人民文学出版社より出版。年末、冰心が『北京晚報』に書いた小小说《万般皆商品》の内容を問題視した編集長と確執、ためらわずに『北京晚報』を辞職する。

1987年　7月、伝記《浪迹天涯　萧乾传》を中国文联出版公司より出版。10月、人民日報社文芸部に転任、編集を担当。

1988年　《文坛悲歌胡风集团冤案始末》を《百花州》同年第五期に発表。

1989年　2月、《文坛悲歌　胡风集团冤案始末》を人民日报出版社より出版。同作品は《历史悲歌》と改題し、香港、台湾でも出版。同年秋、沈从文《记丁玲女士》の校勘を始める。

1992年　11月、《恩怨沧桑　沈从文与丁玲》百花文艺出版社より出版。この年、スウエーデンストックホルム大学の招きに応じ、一ヶ月半滞在。

1994年　雑誌《收获》に、随筆“沧桑看云”の連載が開始。1996年第6期まで計18篇掲載。

1996年　《文坛悲歌　胡风集团冤案始末》は『囚われた文学者たち』上・下巻として岩波書店より出版。一橋大学の招きを受け、一ヶ月日本に滞在。

1998年　第1回魯迅文学奖で、“沧桑看云”をもとに出版された《秋百茫茫》が同散文奖を受賞。同年第4期雑誌《收获》に、随筆“陈迹残影”が掲載、1999年第2期から第6期にも掲載。

2001年　Peter Randの著書、CHINA HANDSを应红と共訳、《走进中国 美国记者在革命中的冒险与磨难》として出版。CCTVキュメンタリー《在历史现场　外国记者眼中的中国》のために渡米。Peter Randを訪問。

2005年　雑誌《收获》に、“封面中国”の連載が開始。2006年第6期まで計12篇掲載。

2007年　《封面中国　美国〈时代〉周刊讲述的中国故事1923～1946》が第五回华语文学传媒大奖の散文家奖を受賞。

2010年　雑誌《收获》に、再度“封面中国”を連載。同年第6期まで。

2011年　雑誌《收获》に、“绝响难听”を連載。同年第6期まで。

2012年　《封面中国2　美国〈时代〉周刊讲述的中国故事1946～1952》を出版。

2013年　雑誌《收获》に、“封面中国”を連載。2014年から隔号連載に。2015年第6期まで。

2014年　6月6日、We Chat公式アカウント“六根”を仲間と始める。著書《绝响　八十年代亲历记》が华语文学传媒大奖散文家奖を受賞。

2016年　We Chat公式アカウント“地名古今”を始める。10月、人民日報社を定年退職。

2018年　副刊文叢（大象出版社）を編集、出版が開始。現在まで約40点刊行。

著書目録

【単行本】

- 巴金论稿※　1986. 4.　人民文学出版社
- 浪迹天涯　萧乾传　1987. 7.　中国文联出版公司
- 人 地 书　1988. 5.　人民日报出版社
- 胡风集团冤案始末　1989. 2.　人民日报出版社
- 监狱阴影下的人生　1989. 8.　湖南文艺出版社
- 枯季思絮　1991. 7.　作家出版社　（注）Gerald Brenanの著作を翻訳
- 世界名人画传　华盛顿　1992. 5.　江苏教育出版社
- 恩怨沧桑　沈从文与丁玲　1992. 11.　百花文艺出版社
- 萧乾传　1993. 9.　江苏文艺出版社
- 福斯特散文选 1994. 1. 百花文艺出版社（注）Edward Morgan Forsterの翻訳
- 八大样板戏※　1995. 2.　光明日报出版社
- 人生扫描　1995. 3.　上海远东出版社

• 我爱虎岗居美生活散记　1996.（内部交流）
• 书边草丛书　秋百茫茫　1996.11.　天津教育出版社
• 风雨中的雕像　1997.1.　山东画报出版社
• 沧桑看云　收获丛书　1997.1.　上海远东出版社
• 深酌浅饮　1997.8.　汉语大词典出版社
• 我们一家，我们的房子和农场※　1998.10.　山东画报出版社（注）翻訳
• 人在旋涡　黄苗子与郁风　1998.10.　山东画报出版社
• 沧桑看云书系　残缺的窗栏板：历史中的红卫兵※　1998.7.　海天出版社
• 沧桑看云书系　依稀碧庐：亦奇亦悲二流堂※　1998.7.　海天出版社
• 沧桑看云书系　摇荡的秋千：是是非非说周扬※　1998.7.　海天出版社
• 沧桑看云书系　书生累：深酌浅饮三家村※　1998.7. 海天出版社
• 世纪之间　来自知识界的声音※　1999.4.　大象出版社
• 黄苗子艺术随笔※　2000.8.　浙江文艺出版社
• 黄永玉：走在这个世界上　2000.9.　大象出版社
• 梁思成：永远的困惑　2000.9.　大象出版社
• 邓拓：文章满纸书生累　2000.9.　大象出版社
• 老舍：消失了的太平湖　2000.9.　大象出版社
• 兄弟在此相会　2000.10.　四川文艺出版社
• 陳迹殘影　2000.10.　四川文藝出版社
• 走进中国 美国记者的冒险与磨难※　2001.1.　文化艺术出版社（注）翻訳
• 巴金：云与火的景象　2001.6.　大象出版社
• 杨宪益与戴乃迭：一同走过　2001.5.　大象出版社
• 王世襄：找一片自己的天地　2001.5.　大象出版社
• 丁聪：画卷就这样展开　2001.6.　大象出版社
• 萧乾：飘泊者在路上　2002.1.　大象出版社
• 田汉：狂飙中落叶翻飞　2002.1.　大象出版社
• 静听回声　新民文库夜光杯文丛　2002.1.　文汇出版社
• 黄苗子与郁风：微笑着面对　2003.1.　大象出版社
• 在历史现场　换一个角度的叙述　2003.9.　大象出版社
• 和老人聊天　2003.9.　大象出版社
• 百年巴金　一个知识分子的历史肖像※　2003.12.　四川人民出版社
• 一纸苍凉《杜高档案》原始文本※　2004.1.　中国文联出版社
• 走進別人的花園　2004.2.　湖北人民出版社
• 李辉序跋　2004.7.　古吴轩出版社

• 李辉传记作品系列　沈从文与丁玲　2005.1.　湖北人民出版社
• 纯爱　冯亦代黄宗英情书※　2005.6.　作家出版社
• 新西行慢记　2006.　同心出版社
• 李辉传记作品系列　黄苗子与郁风　2006.1.　湖北人民出版社
• 李辉传记作品系列　巴金：在历史叙述中　2006.10.湖北人民出版社
• 中国文人的命运　2006.1.　郑州大学出版社
• 沈从文图传　2006.8.　长江文艺出版社
• 笔墨碎片　尔雅丛书　2007.4.　安徽教育出版社
• 封面中国　美国《时代》周刊讲述的
　中国故事（1923-1946）　2007.5.　东方出版社
• 绝响谁听　2010.4.　上海文艺出版社
• 传奇黄永玉　2010.7.　人民日报出版社
• 巴金传　2011.2.　人民日报出版社
• 湖北风景五字歌　2011.11.　湖北教育出版社
• 封面中国2　美国《时代》周刊讲述的
　中国故事（1946-1952）　2012.1.　长江文艺出版社
• 封面中国1　2012.7.　长江文艺出版社
• 老人与书　文化人生丛书　2013.5.　南京师范大学出版社
• 绝响　八十年代亲历记　2013.7.　三联书店
• 黄永玉的文学行当　2013.9.　湖南美术出版社
• 采桑文丛　藏与跋　2015.9.　河南文艺出版社
• 新世纪谁还忧伤　李辉访谈录※　2016.1.　北方文艺出版社
• 穿越洞庭　翻阅大书　2016.4.　中国青年出版社
• 自由呼吸　2016.5.　海天出版社
• 旧梦重温时　2016.9.　九州出版社
• 副刊文丛　副刊面面观※　2017.1.　大象出版社
• 副刊文丛　书评面面观※　2018.3.　大象出版社
• 平和和不安分　我眼中的沈从文　2018.5.　大象出版社
• 黄裳致李辉信札　2018.7.　浙江人民美术出版社
• 蠹鱼文丛　潮起潮落　我笔下的浙江文人　2018.8.　浙江古籍出版社
• 地名古今丛书　可惜从此无徽州　2019.1.　海天出版社
• 巨星巴金，光还亮着　2019.1.　四川文艺出版社
• 沈从文与丁玲（修订本）　2019.5.　大象出版社
• 黄裳致李辉信札（释文本）　2019.6.　浙江人民美术出版社

• 萧乾致李辉信札※　2020. 1.　浙江人民美术出版社
• 先生们　2020. 1.　大象出版社

【文集】
• 重叠的肖像　火凤凰少年文库　1997. 9.　海南出版社
• 跨世纪文丛 6　太阳下的蜡烛　1999. 10.　长江文艺出版社
• 平和，或者不安分 鲁迅文学奖散文获奖者丛书　2002. 9. 河南文艺出版社
• 李辉文集（沧桑看云・往事苍老・风雨人生・文坛悲歌・枯季思絮）2003. 8.　花城出版社
• 牧野作家丛书　李辉杂文选　2004. 12. 时代文艺出版社
• 纸上苍凉　“三十年集”系列丛书　2010. 8.　复旦大学出版社
• 书生累　鲁迅文学奖获得者散文丛书　2016. 1.　江苏文艺出版社
• 风景已远去　李辉散文精选　2016. 6.　海天出版社

（注）※は対談、編著、共著などを示す。